用 意 す る も の

- ダンボール箱　　２箱
  （10kg入りのみかん箱ぐらいの大きさが適当）
- 紙製ガムテープ（クラフトテープ）
- ピートモス　　10～15リットル
- もみがらくん炭　10リットル
- 棒状温度計　　100℃計
- かくはん用の道具（へら・しゃもじ・ゴム手袋等）
- はかり　・投入生ごみ測定用（2kgくらいの調理用等）

ダンボール箱の組み立て方

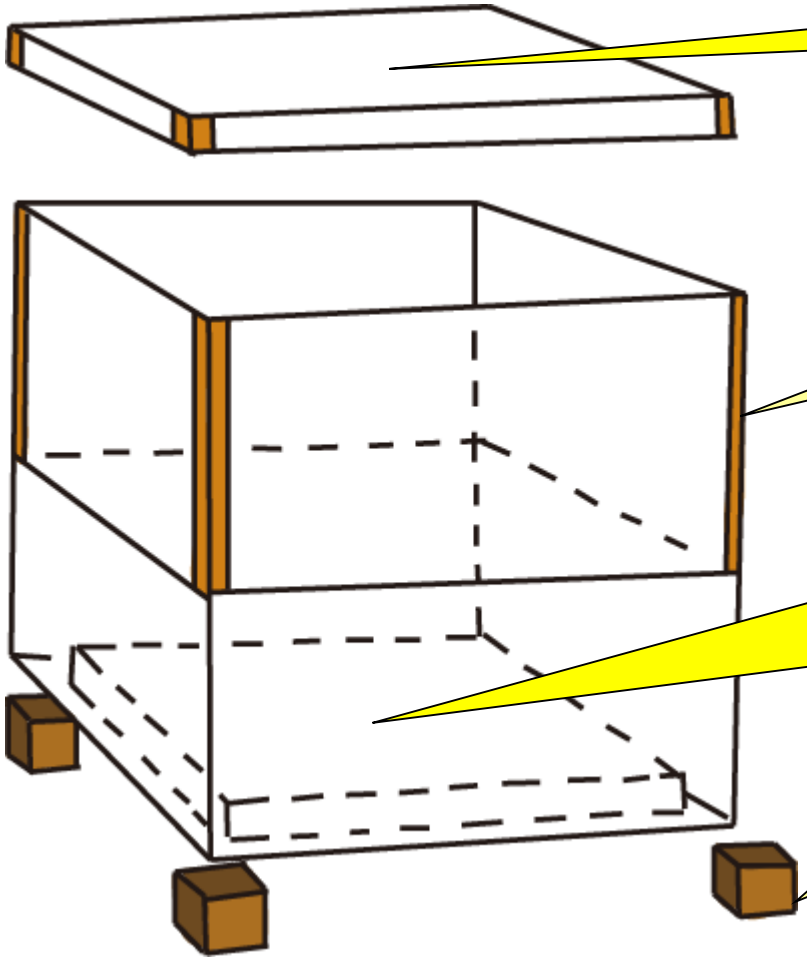
底，すきま部分は紙製ガムテープでとめ、持ち手部分を内側からふさぐ

上ぶたを立ち上げ紙製ガムテープでとめる

別のダンボールで中敷きを作り底を補強する

別のダンボールでふたを作り完成

ダンボールコンポスト完成図



別のダンボールでフタを作る。

上フタを立て、4隅を紙製ガムテープで止めて深くする。

別のダンボールで中敷きを作り、底を補強する。
薄い板を敷く人もいる。
・・・側面も補強しましょう。

風通しをよくするため
箱を床面から浮かせる。

つくりかた

- ダンボールにピートモス：6（12ℓ）、もみがらくん炭：4（8ℓ）の割合で混ぜたものを20ℓほど入れる。

ポイント

牛乳パック（1000ml）を使って、ピートモス12杯、もみがらくん炭8杯を入れると20ℓの基材が簡単につくれます。

- その中に水またはぬるま湯を入れ、かくはんする。（コップで3杯くらい）
  ※強く握りしめたとき，手に水気を感じる程度

- 温度計をさす。

- ダンボールで作ったフタをする。
  ※フタは虫が入るのを防ぎ、保温や防臭の効果がある。

- 生ごみを入れるたびに、よくかくはんする。

- 温度が上がれば、水分がとび生ごみの分解が進む。

生ごみの投入のコツ

- 温度が高く、風通しの良いところに置く。
  ※温度が低いと微生物の活動が弱まり、生ごみの分解が進まない。（温度は15℃以上が望ましい。）

- 生ごみは新鮮なうちに入れる。

- 大きいものは、小さく切ってから入れる。
  ※生ごみを小さく切ると、分解が速く、かき混ぜやすい。

- 一日の投入量は500g～600g程度を目安とする。
  ※少なくてもかまいません

- 魚のあら、イカゴロを入れるときは、少量にするか、火を通すか、湯通しすると臭いを抑えられる。

- 生ごみを入れたら必ずかき混ぜる。

投入しないほうがよいもの

- 腐った生ごみ
- 塩分の多い生ごみ（塩鮭・塩辛・たくあんのぬか床など）
- 大きな骨（鶏がら，豚骨など）
- 種（梅干し・かぼちゃ・スイカなど）
- 貝殻（シジミ・アサリなど）
- 防腐剤の塗布してある柑橘類の皮など

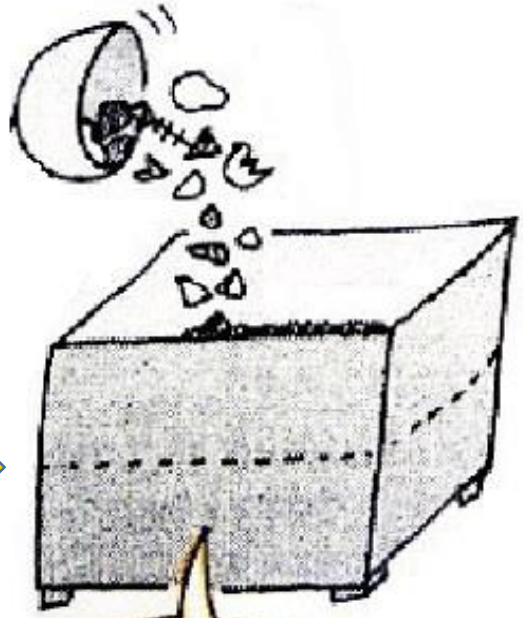
※大きな骨，種類，貝殻は分解に時間がかかる

生ごみ堆肥のできるまで・・・

① 始めてから10日間くらい

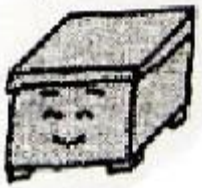
生ごみ投入！！

基材は箱の深さの半分くらい



よくかき混ぜて！空気を送ると微生物が元気になるよ！！

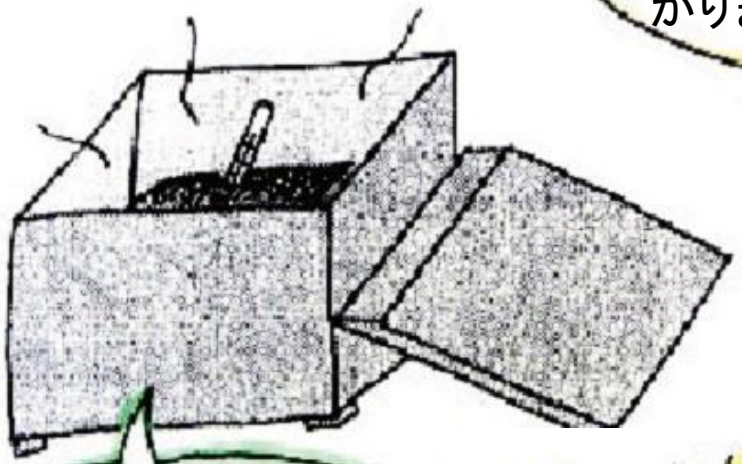
よくかき混ぜるのがポイントです！！



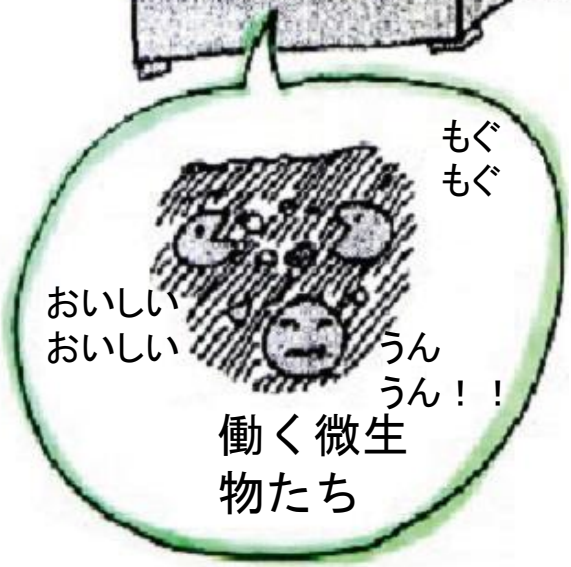
かき混ぜたあとは虫が入らないようにフタをします

② 2週間後～

元気がないときは米ぬかや使用済みの揚げ油を少し入れるといいです



※温度が15℃以上であれば，ゆっくりでも発酵分解は進んで行くので大丈夫！



毎日生ごみを入れてしっかりかきまぜよう！！

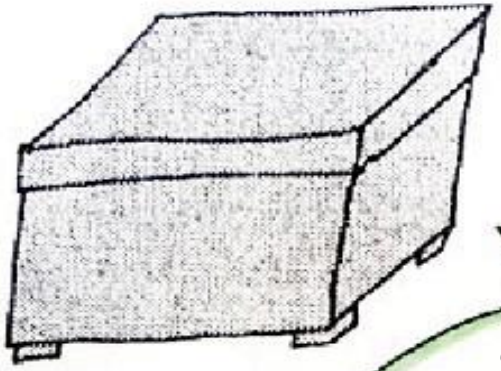
※温度が上がらないときや，小バエが発生したときは，米ぬかや廃油を入れると温度が上がります。
虫や虫の卵は40℃くらいで死滅します。
※入れる目安として米ぬかは一握り，廃油はコップ1杯くらいです。

③ 2～3ヶ月後

生ごみの投入量は1日500gから600gを
目安として3ヶ月位で終了します。

毎日の投入量が少なくても大丈夫です。
総投入量が50kgになるまで続けられます。

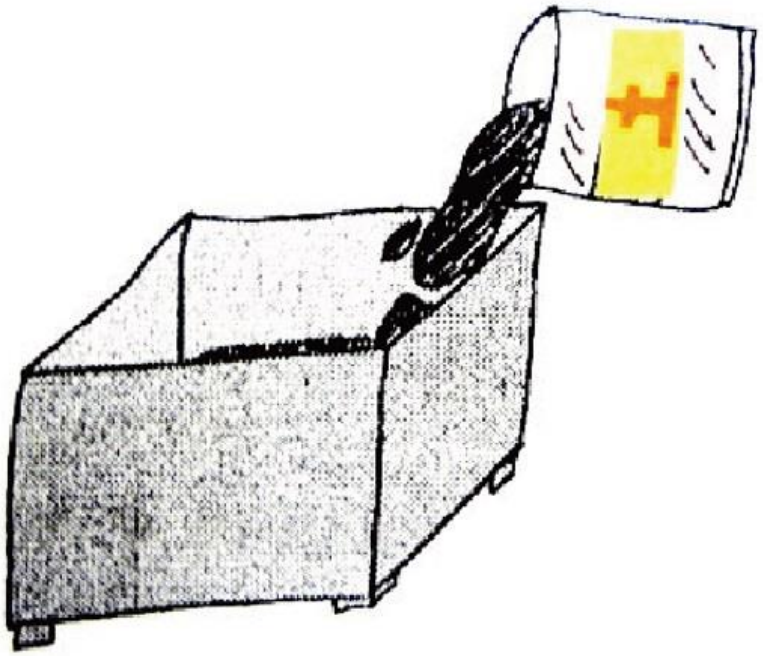
生ごみの発酵分解が遅くなり基材がべたついたりダマになってきたら生ごみの投入を終了します
※ダマは（団子状のもの）はすりつぶしてください
温度が上がります



最後に入れた生ごみの形が見えなくなる（分解）まで水分調整をしながら1～2週間くらいかき混ぜます。
生ごみの形がなくなった終了です。

発酵分解が終わるとサラサラした堆肥ができあがります。

④ 土を混ぜて さらに1～2ヶ月



堆肥1対土2の割合で混ぜ1～2ヶ月ほど寝かせ熟成させてから堆肥として使用します。

堆肥の保管はダンボールに入れたままでもビニール袋に入れ替えてもよいです

熟成した堆肥とは

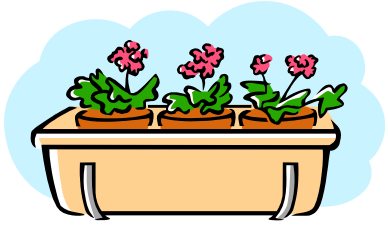
微生物によって分解された肥料のことを指します

できた堆肥の使い方（目安）

堆肥はどれくらい施せばいいの？

畑の場合　１㎡当たり３～５ℓ

プランターの場合　土の量の１０％程度



堆肥はどのように施せばいいの？

種や苗が直接堆肥に触れないように！

全面施肥　畑全体に施肥し、軽くすきこむ。
２週間くらい経ってから種や苗を植える。

植穴施肥　ひと掴み程度を入れ、土を３㎝くらいかぶせ、その上に苗を植える。

溝 施 肥　畝の脇に溝を掘って堆肥を入れ、その上に土をかぶせてから種や苗を植える。

株元施肥　追肥時に、苗の株元や畝の肩部分に１～２掴み程度を施肥する。

成功のポイント

水分状態を50％位に！

強く握りしめた時、手に水気を感じる程度に！

生ごみは新鮮なうちに

水を切り

ベタベタにならないように。

小さく切って入れ

微生物が食べやすいように。

しっかりかき混ぜましょう！

微生物の働きを活性化するために酸素（空気）を送る。

そして、フタをしましょう！

防虫、防臭、保温のために。